勘弁してくれ！

灯星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勘弁してくれ！

【Ｎコード】
Ｎ０２８２Ｏ

【作者名】
灯星

【あらすじ】
いきなり姉貴の存在がまわりから消えてとまどう橘　隼人（はやと）。周りの人間はおろか両親ですら彼女が存在したことすら忘れていた。写真も一枚もなくなっている。それなのに自分だけが姉の風香（ふうか）のことを覚えていた。
だが、２ヶ月後今度は自分の身の上に異変が起こる。
気が付いたら知らない場所にいた。そこで姉と再会できたのだが、俺がなぜか女の体になっていた。姉貴から説明を受けるのは信じられない話ばかりだった。俺が守護の女神だって？

こうなってしまった以上しかたないと割り切るが、それでも男どもに言い寄られるのは我慢できない！勘弁してくれ！
できればコメディぽく書けたらいいなって思っています。

1．消えた姉貴（前書き）

これは『女神の憂鬱』の守護神のお話です。あらすじ程度には話を入れますし、単品でも楽しめるようにしたいと思いますが、できれば女神の憂鬱のほうをざっとでも目を通してから読んだほうが話が通じると思われます。

話がかぶっている部分が大いにありますので。

1．消えた姉貴

「はぁ～」

俺は大きなため息をひとつ吐く。

「どうしたの？隼人。またいもしない姉さんのお話？」

ご飯を食べながらため息をついてしまった俺が悪いのだが、そんな俺に母は容赦なく責めてくる。

「いいよ。どうせ俺の妄想だって言うんだろうし。もう話しないよ」

そう言うとまったく信じようとしない母のいるこの食卓から離れたくて、流し込むように夕飯を食べて自分の部屋にあがる。

３週間前から俺の姉が忽然と消えた。

行方不明とか失踪とかではない。文字通り存在すら消えたのだ。近所や姉の同級生はおろか親ですらその存在を忘れている。家中をひっくり返して姉がいたという痕跡を探したが写真一枚出てこない。

３年前に最後に温泉へ家族旅行した写真は、４人で写ったはずなのにうすら寒いことに両親と俺だけになっている。

そもそもその温泉自体、姉が企画してめんどくさがる俺をひっぱって実現したものだ。２０を超えた男が健康な両親と３人で温泉旅行など理由もなしに行くわけがないだろう。

「何が起こったんだよ、姉貴」

俺はベッドで横になりながら思わずそうつぶやく。

風香という名前の５歳上の姉。けっこう整ってはいたがなぜか目

立たず地味な顔立ちだった。性格も生真面目で基本的に目立つことをしたがらないくせに、たまに考えなしに無茶な事をしでかすところがあった。
寝起きがかなり悪くてボーとしているのでよく世話を焼いていた覚えがある。たしかいなくなったのは三十路になったぐらいのころだ。
ここまでいろいろな記憶があるのだ。その存在自体が無かったはずがない。
だが、自分以外がまったく覚えてないことに、もしかしたら俺の記憶が間違っているのかという気にさせる。
1週間目は周りにも聞いたりして、必死に風香の存在を探し求めた。
2週間目はそんな俺に対して疑惑の目を周りが持つようになったのを気がついて、黙って探すことにした。
そして今週、探しても見つからない事実に本当に俺の頭がおかしくなったのかと思うようになっていた。
しかし、1ヶ月を過ぎた時に玄関に思いがけない姿を俺は見て、そのおかしな現象の真相を知ることになる。

社会人3年目。25歳になるが姉のこともあって、恋人と自然消滅をしてしまったので悲しい独り身だ。それほどお互いに愛情がなかったからそうなったことに未練はない。
だから仕事を終えるとさっさと帰宅するのが日課になっていた。飲み歩くには懐が寒すぎる。家でPCを触ったりするほうが無駄遣いもしないで済む。
そう思って家の前まで帰ると、見たこともないような少女が家の玄関のドアにたたずんでいた。
腰まである美しい白髪。いや、白髪でなく金色が混ざっているので白金か。

後ろ姿だがその身体付きはモデルでも、めったにいないほど均整のとれた身体だとわかる。
なんだ？こんな子がうちに何の用があるんだ？
「だれ？うちの家になにか用？」
そう思って声をかけると、彼女はびくっと身体を震わせながらこちらを振り返る。
うわ～すごい美少女。それに色がすげえ。
今まで見た中でダントツに一位と言えるほど整った顔立ちをしている。少したれ目な大きな瞳は金と薄紫の色違いである。オッドアイというやつだ。初めて見る。その瞼からでる長いまつ毛はくりんとカールされていて人形のようだ。
唇も形よくふっくらしていて、その口から可愛らしい呼び声が聞こえてくる。
「隼人！」
え？あれ？
なんで俺の名前を呼んでいるんだ？
「え？君はだれ？」
思わずそう聞いてしまう。こんな目立つ知り合いはいないと断言できる。わずかにあった程度の仲というか町で見かけただけでも、この容姿を忘れることはできないだろう。
しかし予想外の答えが彼女の口から飛び出した。
「お姉ちゃんがわからないの？何寝ぼけているのよ～」

はい？
おねえさん？
まじまじと少女の顔を凝視する。
痴漢と言われてもおかしくないぐらい顔を近づけてみる。まったく印象はちがっているけれど、そう言われてみればなんとなく素材は姉貴の顔立ちだ。恐ろしいほど若く派手な作りの上に、峰不二子みたいな身体付きになっているのだが。

「・・・・もしかして姉貴？」

おそるおそる聞いてみると、何を今更というように呆れた表情を見せる。その表情はなによりも姉貴と同じものだ。
やはり俺には姉がいたのだ。
その事実に自分の気が狂ったわけではないことに安堵する。その存在を確かめたくて目の前の少女に手を伸ばすが、触れることもできずに彼女の身体を通り抜ける。

「ゆ、幽霊になっちゃったのか姿も映らないし、ドアに触れることもできないのよ・・・」

その事実に絶句してると姉と名乗る少女は、心底困っているというように悲しそうにそうつぶやいた。
事情を聞きたいがこの玄関で聞くわけにはいかない。少女の姿をもしほかの人が見えても、噂になるだろう。しかし、おそらく俺以外に見える人がいないのではないかと、直感的に思う。記憶も俺しか残ってないからだ。そうなると俺は誰もいないところで、一人で話している頭おかしい奴になってしまう。ただでさえ妄想癖がでてきたと思われてそうなのに、こんなところを見られたら精神科に連行されそうだ。

「・・・・・と、とりあえず入って俺の部屋で話そう」

そう言って玄関の扉を開いて少女を中に促がす。
姉もどきの少女はその部屋を見てはっと息を飲む。姉の存在があったときは玄関の入り口にはたくさんの姉のつくったオブジェが飾られていた。それが一晩で消え去ったのだ。やはり彼女は姉かもしれない。少なくても姉の精神を宿っているのだろうと思う。
なんとも悲しそうな表情で母を見ている姉を2階に促しながら、自分の部屋に連れて行った。
少女・・・いや姉に事情を聞くことにした。

ぼつりぼつりと事情を説明してくれる。
いきなり部屋にブラックフォールのようなものが出てきて、気が付いたら異世界にいた。さらに姿形も変化していた。
で、人に会えたら神殿に連れていかれて、そこが神の国で癒しの女神だと言われたと。
人間の記憶があるのは異例なのでトップの神に消されそうになったけど、なんとかこのままでいさせてもらうことになった。
帰ることもできないし女神として修業のようなものをしてたら、ある神に記憶を消されてしまった。
なぜか気が付いたらこの実家の近くの駅にいて歩いてこの家に帰ってきたと。

どこかの小説の内容にしか思えない。しかし、姉の変わり果てたこの姿がそれが事実であることを告げている。話がでかすぎて思わずため息が口からでる。
そうすると、姉は悲しそうな表情で聞いてくる。

「し、信じられないでしょう。私でも夢だとしか思えないもん・・・」

そう言うので外見について突っ込むと、姉は髪の毛をつまみながら姿が変わっていることに今更ながら驚嘆している。

可哀そうだと思うが事実を彼女も受け止めないと話が進まないだろう。

止(とど)めとばかりに姉の姿が消えてしまった写真を彼女に見せる。

「1ヶ月前からいきなりそうなったんだ。お袋に姉貴のこと聞いても笑って本気にしてくれないしな。正直、周りがあまりにも普通に姉貴をいないものとしてるから、俺が気が狂ったのかと思っていたぜ」

そう俺は言うが写真を凝視していてまったく聞いてない感じだ。

姉はしばらくは驚きで顔が固まっていたが、やがて諦めたかのような苦笑いの表情に代わる。

「フフ。そっか。私って消えるしかなかったんだ・・・こっちでもあっちでも・・・」

続いて消え去るのが運命であるようなことを言う姉に叱咤する。

「それは俺も分からねえよ。でも簡単に、諦めるなよ。まだ姉貴はいるんだろ？触れなくても俺には見えている。姿は違うけど姉貴ってすぐに認めたぞ。だからこちらでもあちらでもいいから、生き永らえる方法考えろよ。向こうで記憶消してくれって言われたわけでないんだろ？」

姉は俺の言葉を聞いてしばらく考えたあと無理かもしれないけど、一度あちらに帰ってみると言い残してそのまま姿を消していった。

「しかし・・・なんで俺だけ覚えていて姿が見えるんだ？」

シスコンでもないがそれなりに仲がよかった姉に対して、自分も記憶がなくなればよかったのにと薄情な事は思えない。しかしなぜ自分だけが残っているのかまったくわからない。

「どうせなら姉貴も最愛の男とかに覚えてもらっていればよかったのにな。まあいないんだろうけど」

そう言いながらこの不可思議な出来事は、自分の胸にだけしまいこむことにする。誰かに言っても仕方ないからだ。

しかし、俺だけが記憶を残されていた理由は、それから約1ヶ月後に自分にとっては本当に不本意な形で知らされることになった。

1．消えた姉貴（後書き）

初めての方も、女神の憂鬱からお付き合いある方もよろしくお願いします。

2．なんじゃこら～！

姉の件も事情が分かって1ヶ月近く経った。俺は姿を現さないってことはあちらに無事帰れたんだと思うことにした。

「たよりがないのは、いいたよりって言うしな」

俺は部屋でベッドに寝そべりながらそうつぶやいた。そろそろ日が変わるころだ。寝ないと明日の仕事にひっかかるな。

そう思って目を閉じることにした。まさかそれが地球での最後の風景になるとは知らずに。

異変に気がついたのは、自分の身体の周りに風を感じたからだ。部屋で寝ていたはずなのに、なぜ外のような風を感じる？

そう思って目をあけると見渡す限りの草原が広がっていた。

ここ、どこだ？

ありえない状態を目にして、事態を把握すべく辺りを見渡す。

そこに一組の男女が抱き合っていた。いや、正確には男性が女性を横抱きに支えているようだ。二人ともこちらを見ているのだが、二人の容貌がとても派手なので驚く。不思議な事に二人とも瞳の色が左右ちがいだ。大柄な男性の瞳は深紅色と青色で、髪は短く黒だ。その彼に抱かれている少女といったほうがよさそうな女性の瞳は金色とうす紫色で、長い髪は白金色である。とここで、女性のその瞳に見覚えがあることを思い出す。

「もしかして・・・・あねき？」

そうだ。あの姿は間違えなく1ヶ月前玄関に現れた変わり果てた

姉貴の姿だ。あの容姿を間違えるわけがない。
だが、少女は信じられないとばかりに目を大きく見開いてこちらを凝視している。
「姉貴だよね？」
確認の意味でもう一度聞きながら、彼らのそばにゆっくりと歩み寄る。
「は・・・隼人？」
少女の口から俺の名前が出る。やはり姉貴だ。顔を強張らせたまま、姉貴は支えてもらってた大柄の男から離れて俺の腕に手をのばしてくる。
「なんとか、神の国とやらに戻れたんだな。よかったよかった。心配してたんだよ」
姉が無事、言ってた神の国に帰れたんだと知って安堵する。と同時に姉貴が俺を掴んでいることに違和感をおぼえた。前は触れなかったのに、なぜ今は掴めるのだ？
「あれ？姉貴触れることができるようになったんだ。なんで？」
そう言いながら俺は逆に姉貴の腕を掴み返した。俺も少女に触れることができた。
あーなるほど。これは夢か。
「もしかしてここは夢？わざわざ姉貴、俺の夢の中に会いにきてくれたのか？律儀だな～」

確かに心配していたので、こうして教えてもらったら安心する。よかった、よかった。
そう思って何度も頷いていると、目の前の姉貴である少女が真っ青な顔して、いきなり突飛な行動に出た。

「隼人！ごめん！」

その掛け声とともに俺の胸をむきゅっと掴む。

「な！いきなりなにすんだよ！姉貴」

俺はあまりにいきなりの行動にびっくりして慌てふためいたように姉貴の手を払いのけた。
お前は痴女か！
むきゅっとなったぞ、むきゅっと・・・。

「ってあれ？」

なぜ、平べったい俺の胸がむきゅっとなるんだ？
おそるおそる視線を姉の顔から下げていく。頭を地面が見えるぐらい下げた時に、俺はパジャマの隙間から見える谷間を目撃してしまった。

「・・・・」

考えるより先にそっと両手で胸を触る。むぎゅっとたしかなふくらみの感触、それは手からだけでなく自分の胸からも感じていた。
２５年間生きてきて初めて味わう感触。

「なんじゃこら〜！！」

俺は自分が出せるだろう最大ボリュームの叫びを出した。叫んだ内容が深夜番組で見た昔の映画から好きになった俳優の名セリフになってしまったのにも、一度言ってみたかったからか？

叫んだと同時に目の前が真っ暗になる。

俺は考えることを放棄した。

ここは？白い天井が見える。一瞬病院かと思ったが、目の前で俺を見つめている少女を見て違うことを悟った。いっきに悪夢のような先ほどの出来事を思い出す。姉である少女はまだこちらが目を覚ましたことに気がついていないようで大きなため息を何度も付いていた。そしてぼつりとつぶやく。

「私の子として生まれちゃったこともショックだよね」

はい？私の子？つまりは・・・

「姉貴の子？」

いつのまにそういう事になっているんだ。っとそれより自分のことだ。

掛布の中で自分の身体を触る。やはり柔らかい感触がある。

「ああー。やっぱ夢おちってわけでなかったか」

そうであろうと姉の姿を見てから想像はできていたが、自分自身の手で確認するとよけいにへこむ。

「勘弁してくれ～。こんな奇想天外なことってあるか～」

俺は思わず情けない声で嘆きながらベッドの上で掛布を頭から被って身体を丸めている。

そのつもりはなかったのに、そうすることで自分の身体がはっきりと見えてしまった。パジャマからはみ出る白い胸。

こんなのありかよ！

しばらくの間そのカッコのまま俺は固まっていた。

姉は何も言わずに俺の頭を布の上からなでてくれている。姉としても俺の状態にとまどっているのだろうし、俺が落ち着くのを待ってくれているのだろう。

俺は大きく深呼吸してから掛布から顔を出した。身体を見たくないので、顔だけ出す形だ。

そうして、姉に意を決して事情を聞くためにこう言った。

「姉貴！事情説明頼む！」

姉はその言葉を受けて真剣な顔つきで想像を絶する説明をし始めた。

「あのね。隼人。わかっていると思うけど、ここは前に話してた異世界の神の国なの」

出始めはこんな感じで話がはじまった。

3．受け入れたくない現実

姉はそこで橘風香としての記憶を残したまま、癒しの女神として修業していた。でもある神に記憶を消されてしまったと。

その後、魂の一部のようなものが地球の俺のところに来たと。それが俺の感覚では1ヶ月前のことだ。

で、姉が戻ろうとしたら自分の身体の中で『戦神と結ばれて守護神を創りなさい』という声があった。

それで、戦神と結ばれて子供が生まれたら俺だったと・・・。

説明を聞いて思わず叫んでしまう。

「女になってたのもショックだけど、姉貴の子だと!?」

今まで姉だった人が自分の母となるのだ。ショック受けないわけがない。女の身体もショックだが、その件もかなりパンチがきいている。

「だっていなくなってから一ヶ月ぐらいしか経ってないだろう?それなのになんで生まれるんだよ?ありえないだろう」

姉が嘘つくわけがないとは分かっていながらも、俺は悪あがきに常識を口にする。ここに俺の常識なんか通用しないことは当たり前なのにだ。それほど信じたくない内容だった。

「残念ながら、ここでは一週間もあれば産めちゃうのよ・・・」

目の前の少女は申し訳なさそうにそう言う。やっぱそういうオチ

かよ。
頭を抱えようとして、姉である少女の後ろに姿鏡があるのに気がついた。その中で頭から布をかぶって顔を出している変なかっこをした少女が俺を凝視している。もしかして、あれがいまの俺の姿か！
考えるよりさきにかぶってた掛布を取って、ベッドの上に立つ。そうすると、鏡の中の少女も同じ動作をした。
その姿をじっと見る。
ものすごく不機嫌という文字を顔中に張り付けた、高校生ぐらいの肩ぐらいまである黒髪の少女が、なじみの俺のパジャマを着て立っている。服がだいぶぶかぶかになっているので、背は縮んでしまったようだ。まあ女で１８０センチある人はめったにいないだろうが。
目の色は両目とも薄紫色だ。目の前の少女の片目と同じ色彩になっている。顔立ちは姉と同じくだいぶ派手になっているが、自分が中学ぐらいの忌まわしい顔立ちそのままだ。俺は中学時代は思いっきり女顔で、よく仲間にからかわれたものだ。さすがに高校３年ぐらいで背がぐんぐん伸びたので、間違われることもなくなり顔立ちも男らしくなったのでほっとしたが。
トラウマだったその顔に加えて、今度は身体まで女になってしまったというわけだ。
思わず、姉貴に愚痴を言ってしまう。

「姉貴を責めるのはだめかもしれないけど、せめて男に産んでくれよ～」
「ご、ごめん」

姉は傷ついた顔をしながら瞬時に謝ってくる。だが、姉にはどうしようもなかったんだと俺は十分わかっていた。産み分けなぞできるわけがない。ましては俺がこうなるなどと思いもしなかっただろうから。

「分かっているよ。ただのやつあたりだ、ごめん」

俺は姉のこの顔には昔から弱く、あわてて謝ることにした。さらに話題を変えることにする。

「で？相手の戦神とやらはさっき姉貴を抱いてた大男か？」

俺はさきほど、この姉を抱いていた男を思い出してそう言う。すると姉貴はすこし目を緩めながらその男の名前を教えてくれる。

「うん。オリセントって言うの。今、隼人が落ち着くまで2人のほうがいいだろうって自分の部屋にもどってると思うわ」

そういう姉の表情が、本当に柔らかく俺でさえ見とれてしまうほど美しいものであった。ここで、姉がそのオリセントとか言う男性のことを本当に思っていることが嫌でも分かってしまった。

使命とか言ってたけれど、きちんと相手のことを好きになっているようだ。

「色々納得できないこともあるし、この状態を受け入れることはできないけど、姉貴が消えることなく幸せになっているって分かったことだけは救いだよ」

この前会った時の消えて無くなりそうな儚い笑顔をみていたので、そのときとはちがう幸せそうな笑顔を見れて肉親として安堵したので、そのまま気持ちを口にする。

そう言うと、姉は一瞬驚いたように目を開く。そのあとすぐに、苦笑も交じったような笑顔に変えてこう言った。

「ありがとう。隼人には悪いけど、隼人がここに居てくれることは本当にうれしいの。自分勝手だよね、ごめんね」

姉の正直な気持ち。それはそうだろう。こんなところでたった一人で風香の記憶を持ったままいたのだから。逆に俺が先にそういう立場ならさっさと記憶を消してくれと言っていたかもしれない。ここがどんなところだか分からないし、姉曰くそれなりに快適な暮らしができていたらしいが、それでも孤独感はぬぐえないだろう。

俺としては今までの人生にそれほど未練があるわけではないし、姉のそばで一緒にここの人生を楽しむのもありかと思う。なんせ、恋人もいなくなったし、仕事もお金のためだけでなんの執着もなかったのだから。

俺だけが姉を覚えていた上にその姿をみることができたのは、今から考えるとこういうことになるからだったのだろうと思うことができる。

まだ、気持ち的には受け入れていないけれど、頭ではそう理解していた。

「せめて男神に産んであげれればよかったんだけど・・・」

だから姉貴がどうしようもできないことをこのように口にしたのを聞いて、軽口で返すことができた。

「オカマの親みたいなこと言うなよ、まったく。姉貴がどうこうできる話ではないんだろ？時間はかかるだろうけど、この状態を受け入れるしかないなら仕方ないだろ」

そう言うと、姉はすこし涙を目にためながら俺を抱きしめてきた。相変わらず、姉が泣き虫だ。

「はーくん。私ができることはなんでもするから。おねえちゃんを頼ってね」

おねえちゃんね～。

そう言われてそれがここでは違うという話を思い出して、思いっきりため息をはく。

「はぁ。おねえちゃんって言ってもここではかあちゃんになるんだろ？ほんと、カオスだぜ」

姉貴が母・・・。

この事実はあんまり受け入れたくない。少なくてもしばらくは時間かかりそうだ。

「ねえ。隼人。名前どうするの？私はフウカってままでいっているんだけど、違う名前をレイヤかゼノンに決めてもらう？男の名前だけどそのままハヤトでいく？」

俺のつぶやきに姉貴は反応したのか、気まずそうに小さな声で俺の耳元で聞いてくる。

それを聞いておれは考えるより早く返答していた。宣言するために姉の身体から離れる。

「ハヤトでいく！名前まで変えられてたまるか。変って言われてもハヤト以外呼ばれても返事しねえよ」

姿・性別まで変わってしまったのだ。せめて名前ぐらいはこのままでいいだろう。

女だろうが、ハヤトだ、俺は！

「そうね。ここだと、別に男の名前って言うのはないかもしれないし、大丈夫だと思うわ」

姉貴は俺をみながらそう言った。続いて俺の気持ちを軽くするようなことを言ってくれる。

「ねえ。私もハヤトの親って気持ちにはまだまだなれないし、ハヤトにしたら余計に私が母とはおもえないでしょ？だから今まで通り姉として接してほしいんだけどどうかな？」

それは俺としても願いたいことだ。さすがに母とは呼べない。ずっと姉として見ていたのだから。

俺は大きく頷く。

「あ、でもこれからは姉貴でなくフウカって呼んでくれたらうれしいな。だって周りからみたらおかしいだろうしね」

それはそうだ。

「フウカ。これでいいか？」

すこし気恥ずかしいが、俺は勇気をだして呼んでみる。呼ばれたほうも恥ずかしいのか、顔をすこし赤くしている。

なかなかいろいろな意味で前途多難だが、どうにか乗り越えるしかないようだなと他人事のように俺はそう思った。

3．受け入れたくない現実（後書き）

次回は隼人のことをハヤト、風香のことをフウカで統一します。この回までは二人の中で気持ち的にまだ隼人、姉貴って感じだったので、ばらばらな表現になっていました。

4．着替えだけで気力消耗だ・・・。

「とりあえず、服どうにかしないとね・・・」

フウカが俺の姿を見て考えるようにしてそう言う。確かにいつまでもぶかぶかのパジャマを着ておくわけにもいかないだろう。だが、スカートは断固拒否させてもらおうと俺は元姉であるフウカに声をかけようとしたが、部屋の空間がゆがんだためにそれは阻止された。

そこから現れたのは女性だ。これはテレポートか？フウカは慣れたように普通に彼女を見ている。テレポートが当たり前の世界なのだろう。さすが、神の国。なんでもありなのか？

どういう仕組みでなっているのだろうと現れた女性を凝視する。濃い蒼色の肩ぐらいの長さの髪の美女だ。目の色も一緒である。細身でおだやかそうな顔立ちをしていて知的な雰囲気がある。

かなり俺の好みのタイプである。

思わず、今まで通り男の目で彼女をみてしまった。

それがばれたのか、彼女のほうもこちらを興味深そうに見ている。視線を外すか迷っているうちに彼女のほうから外して、フウカに声をかけていた。

「フウカ様。もしかしてそちらの御方は・・・」

「うん。守護の神よ。とりあえず説明は後にして、ゼノンたちに会わせるのにこのかっこだとどうかと思うので、服を用意してもらえないかしら？」

守護の神とか言われてもまったく実感ない。身体は変わったのはいやでもわかったけれど、別に違和感がないからかもしれない。

あ、そうだ。ここできちんとズボンを注文しないといけないと思いだして口を開いたと同時にフウカがその注文をしてくれる。

「あのね。難しいかもしれないけど、男性の服にしてもらえるかな？なければせめてズボンでお願い」

さすがにフウカは分かっている。助かった。

目の前の女性はすこし戸惑いを見せるが、すぐに返事して手を空に振る。それと同時に彼女の手の中に白と黒の布のような物が舞い降りる。

おお！

「すげぇ～。魔法のランプだ」

俺は考えるよりさきに目の前に出来事に感心してしまった。本当にいろんなことができる世界なんだな。こんなところでもう馴染んでいるなんてフウカもノーテンキだなって思ってしまう。

「このようなものでいかがでしょうか？もし丈など長ければ調整いたしますので、着替えて頂けますか？」

女性はいきなり現れた服をフウカに渡す。ズボンなのでひとまずほっと息を吐く。

「う、うん。わかったから君も姉・・・フウカも出て行ってくれる？着替えたら呼ぶから」

いくら女性になったからと言っても、いや、だからこそ誰にも着替えるところを見られたくない。着替えと言うことは自分の身体を見なければいけないわけだから一人で覚悟を決めてやりたいのだ。

「わかったわ。廊下に出ておくから。時間かかってもいいからね。わからないことあったら呼んでちょうだい」

さすがに元姉のフウカは俺の気持ちをわかっているようで、怪訝そうにしている女性を連れて扉の向こうに行ってくれた。

さて・・・。覚悟を決めるしかないか。

自分のパジャマに手を掛けながらごくっと唾を飲み込んだ。

出来るだけみないようにパジャマの上を脱いで、持ってきてくれたチャイナ服のようなすこし丈の長い詰襟の白の上着をすばやく羽織る。前が見えないこの形でよかったとは思うが、服の上からも胸の頂上がくっきりと出ているのを見て俺は思わず大きなため息をついてしまう。女装している気分だ。そんな趣味まったくないのに・・・。

持ってきてくれた服の中に下着のような物が入っていたが、見るからに女性のものである。さすがに履く気になれないので、カッコ悪いかもしれないがもともと履いていたボクサーブリーフのまま、パジャマの下も黒のズボンに履き換えた。寸法は本当にちょうどよい。さきほどの少女は直すと言っていたけれどまったく必要ないだろう。

俺はなんとか着替え終わって目の前の鏡を見るとそこには、疲れ果てた顔をした少女がズボンを履いて突っ立っていた。

これが俺なのかよ・・・。これからずっとこの姿なのか。

いやだと叫んでしまいたい。だが、叫んだところでどうすることもできないことは分かっていた。フウカが消えた時に周りの者全てが記憶を無くしてしまったように、俺がこちらに来た時点で俺のことも全ての者が忘れてしまっているだろう。これは推測ではなく確信があった。

守護の神とか言われてもピンとこないけれどこうなる定めであったと、頭のどこかで理解していた。

それならば開き直るしかあるまい。
たかが2ヶ月とはいえ、姉のフウカは一人でこの状態で過ごしてきたのだ。それに比べたらそばにその姉がいるということで俺の今の状況は姉よりだいぶ救われているのかもしれない。
そう思うことで自分を前向きに考えさせることにした。
フウカを呼び戻すと父親であるという戦神を呼んでいいかと聞いてきた。
正直どう返すべきか返答に困る。フウカを母だと思うことなど到底無理だ。それと同じで知らない男性がいきなり自分の父であると言われても、今まで日本に居た両親の記憶があるだけにすんなり受け入れることなど不可能だ。

「ああ。でも、あの人を父親として接しろって無茶な注文はやめてくれよ」

俺はフウカにそう言いながら自分の頭を無造作に掻く。だが、いつもと違って髪が長いので指に絡まってしまう。それをすーと腕をのばしながら自分の髪をひっぱる。長い。落ち着いたら切ってしまおうか。
そんなことを考えていると、フウカが軽く苦笑してきた。

「オリセントはそんなこと要求しないと思うわ。詳しくは後できちんと話するけれど彼は、ハヤトが生まれてくるのを１００年以上待ち望んでいたからね」

１００年？

「なんで？」

思ったことがすんなりと口にでる。１００年って長すぎだろう。

「あなたが守護の神だから。自覚はまだないだろうけどね」
「な～るほどね。と言ってもよくわからないけど」

守護の神ね～。さっきも言われたっけ？
俺は乾いた笑いをしながら頷く。詳しく話聞かないとよくわからないことだし、今その話をフウカがする雰囲気もないのでとりあえず流すことにした。あとで説明してくれるだろう。
しばらくするとフウカのそばの空間がゆがんで、最初にフウカを抱いていた黒髪の大柄な青年が姿を現わした。
テレポートは2度目なのでそれほど驚かずにいられたが、ひどくどういう仕組みなのか気になる。
俺は現れた彼をじっと見た。すこし強面だが十分顔は整っているだろう。だが、さすがに戦神とだけあって軍人のような威圧感は半端ではない。フウカと同じく色違いの赤と青の瞳はとても力強くて、印象的である。
よくこんな人がフウカの恋人になったもんだな。
ついそう思ってしまう。
彼のほうをじっと見ていると、強面の顔をすこし緩ませて俺のほうにすっと片手を差し出してきた。笑うと意外にも表情が柔らかくなった。

「戦を司っているオリセントだ。いろいろと思うこともあるだろうが、まずは歓迎させてくれ」
そう言われておそるおそる手を伸ばして彼と握手する。自分の手が身体に合わせて小さくなったからもあるだろうが握られた手はかなり大きい。
「えっと・・ハヤトです。正直どう言ったらいいか分からないです

けど、よろしくおねがいします」

とりあえず名前を名乗ることにした。

4．着替えだけで気力消耗だ・・・。（後書き）

中途半端ですが長くなるのでここで切らせてください。

5．3人の神との対面

こまった。あと何を話すればいいのか・・・。
戦神を前に俺はかなり困惑していた。

「あ、あと。あね・・・じゃあなかったフウカがお世話になっています」

言えることと言えばこれぐらいしかない。俺は日本人らしく軽く頭をさげた。

「いや。お世話になっているのはこちらだよ」

そう言ってお互いに握手を解く。オリセントは続けて笑みを浮かべながら俺にとってはすごくありがたい提案をしてきた。

「オリセントと呼んでくれ。ハヤトにしてみればいきなり俺を父と呼ぶことに抵抗があるだろう。だから、同じ神の仲間として接してくれたらいい」

「すみません。気を使わせてしまって。そう言ってもらえると助かります。フウカも姉だったので今更、母と思うことはできないんですよ」

俺はほっと小さく息を吐きながら彼に本音を伝えてた。
本当にたすかった。
そんな俺の頭にいきなりオリセントはぽんっと手を置いて、すこし前かがみになりながら視線を合わせてきた。色違いの瞳が真っ直ぐに俺のほうを向いている。

「仲間なんだからできれば敬語は止めてくれるとうれしいが？これから俺たち3人は接することも多くなるだろうしな」

け、敬語なしですか～？こんなお偉いさんみたいな人相手に・・・。

いきなりそれはきついっす。

思わず彼から視線を外し、フウカに助けを求める。

しかしフウカの反応は冷たかった。

「それはそうね。ハヤト。そんなに緊張しないで普通にしゃべって大丈夫よ？」

「そ、そうは言うけど、姉貴。いきなり会ったばかりの人に敬語なしでしゃべれるかよ」

俺はついくせで姉貴と呼んでしまう。長年のくせはさすがに今日明日で治らないものだ。

動揺を隠せない俺に対して、姉は暢気そうに考えるように頬に手を当てる。

「ん～。気の持ちよう？私も最初は敬語なしにするのに、意識しないとだめだったけど今はまったく普通にしゃべれているよ？」

フウカはそう言いながらオリセントのほうを嬉しそうに見ている。昔を思い出している様子だ。その表情は本当に艶やかで幸せを全面に出している。

「フウカも最初は敬語だったな。それより前にいきなり空から飛んできてびっくりしたが・・・」

それに対してオリセントのほうも、今までの柔らかくなった表情

をより一層柔らかくしてフウカに話かけている。
ああ。本当にこの二人好き合っているんだな～とこんな時なのに感心してしまった。

「そ、それは言わないで。あの時は恥ずかしかったんだから」

フウカはそう言いながら恥ずかしそうに両手で赤くなった頬を隠している。
言いたくないが、バカップルの雰囲気が二人から漂ってくる。
何も言えずにフウカのほうを見ていると、その視線に気がついたようですこし気まずそうにこちらに向きなおしてくれた。

「あー。オリセント。フウカみたいにノーテンキでないんですぐには無理だけど、徐々に普通に話できるようにします・・・じゃあなかった。普通にはなすよ」

俺はそんなフウカにあえて突っ込まない代わりにすこし嫌味をのせて、オリセントになんとか敬語なしで話すように努力する。これぐらいは許されるだろう。
そういう俺に反論しようとフウカは口を開くが言葉を発することなく、一瞬動きを止める。
どうしたのだろうか？と訝しげに彼女を見ていると、神の国の責任者であるという人たちがここに来ると教えてくれる。
神の責任者というと、ギリシャ神話でゼウスとかそういう立場の人だろう。
いきなり会うと言われても心構えができるわけがない。
断ろうかと一瞬思ってしまうが、どうせいつかわ会わないといけないんだ。それならさっさと済ましてしまったほうがいい。
俺は結局、どうにでもなれとなげやりな気持ちで了承することにした。

すぐさまに部屋の空間が歪んで、金と黒の色違いの青年二人が姿を現す。
オリセントをはるかに凌ぐギリシャの青年像のような顔立ちの双子に俺は思わず息をのむ。
神の国だけあって美形ばかりだ。こんなに美しい男性たちは見たこともない。

「これはこれは・・・。俺はレイヤだ。光を司っている。で、こっちが闇の神のゼノンだ。一応ここで一番古株ってことで責任者のようなもんだ」

まずは金色の髪と瞳の青年が楽しそうに俺の姿を見ながらそう挨拶をしてきた。その表情は清々しいモノで正直威厳を感じさせない。顔立ちをのぞけば日本にいるような軽い口調の青年のようだ。
それに反して同じ造形なのに印象が全く違う黒色の髪と瞳の青年は、ただ黙って観察するようにこちらを見ていた。

「ハヤトです。よろしくおねがいします」

俺はとりあえず日本人らしく軽く頭を下げながら、二人にそれだけを言う。

「やはりフウカと一緒で名前あるんだな。そのままの名前でいいのか？」
「あ、はい。変えないでください」

俺はフウカから名前のことを聞いていたのですぐに返事を返した。こればかりは意地になっていると言われても譲れないところなのだ。

目の前のレイヤも別に強制するつもりはないようですぐに了承してくれた。そしてじっと俺の姿を見てくる。

「うーん。フウカよりは安定している神気だな。だが、まだまだ不安定ではあるようだ。守護の神であることは自覚あるか？」

しばらく観察してからそう聞いてくる。自覚などあるはずもない。そう言うとフウカが横からフォローしてくれた。

「それについては私と同じで、いろいろと力の勉強とかしていけば自然に分かってくると思う。と言っても私もまだまだ自覚少ないんだけど」

なるほど。それを聞いてフウカも俺を同じでこの状態に戸惑い、それでも勉強して慣れていこうと努力したのだなって今更ながら思い知る。

そして、彼女が先輩として一緒にここに居ることは、俺にとって本当に助かることなのだと感じることができた。最初にあるかもわからない道を作るのと、出来ている道を進むぐらいの差はあるだろう。

「そうですね。しばらくはフウカと一緒に力やこの世界について、学んでいけばなんとかなるでしょう」

今まで黙って俺を見ていたゼノンとかいう黒の青年がそう言ってくる。

「ハヤト。いきなりこんなことになってとまどいはあると思う。だが、俺たちは君がこうしてきてくれたのを心から喜んでいることをわかってくれ。守護の神としてよく誕生してくれた」

そう言いながら金色の青年・・・レイヤがすっと手を差し出して、握手を求めてきたので俺も手を伸ばす。

「私としては守護の神としてももちろんとても嬉しいですけど、人間の記憶を持ったまま神として過ごしているフウカのためにも、あなたがそばに来てくれたことを心強く思っています」

黒髪の青年・・・ゼノンも手を差し出してきたので、同じように握手した。彼らもフウカのことを大切に思ってくれているようだ。

「ありがとうございます。フウカは俺としても大切な姉だし、ここで幸せに暮らしているのはあなた方のおかげでしょう」

心からの感謝をこめて俺は彼らに軽く頭を下げた。

「俺はまだ正直実味ないし、守護の神と言われてもなにもできないですけど、別に日本に未練はないですし、こちらでお世話になるのもありかなって思っています」

住む場所が他にないのだから開き直るしかない。だからどうしてもお世話になる彼らにそう言うと、視界の端で切なそう表情でフウカが俺を見ていた。

俺の心情を読み取っているのだろう。

「ただ、この姿は正直勘弁してほしいんですけど」

俺は苦笑いしながら努めて軽い口調でそう言うことにした。

それに対して、ただ愛想笑いのようだったゼノンの笑みが口元をあげてとても深いモノになる。美形なだけに見るもの全てを誘惑し

てしまうような深い微笑みだ。

「あなたにはその姿は不本意でしょうが、そうなった理由も必ずあるのだと思いますよ。フウカとあなたが人間の記憶を持ったままこの神に転生したのにもね」

何を言われたのか頭で理解できないぐらいにその微笑みに動揺してしまう。俺にはそういう趣味もないのだが、これほどの微笑みをされると顔が火照ってくる。

「悪いな。さすがに性別とか外見は俺たちにもどうすることもできないんだ。ゼノンのいうようにそういう運命だったと思って諦めてくれ」

ゼノンの隣でレイヤがわずかに片方の口元を上げ苦笑しながら俺にそう言ってくれて、まるで呪縛から解き放たれたかのように思考が回復する。同じ顔なのにレイヤの微笑みは清々しいものである。

こちらのほうが被害がなくて本当に助かる。

「分かってますよ。受け入れたくないですけど、受け入れるしかないのでしょ？」

回復した思考でなんとかそう返事した。

「そうですね。とりあえずはフウカと一緒にここの事などを学んでいってください」

ゼノンの言葉でこの場はお開きになり、レイヤとゼノンはすぐに来たときとおなじように姿を消していった。

「じゃあしばらくは二人で色々と話ししたいだろうし、俺も部屋にもどるぞ。今日はずっと神殿内にいるから用があればいつでも呼んでくれ」

オリセントもそう言い残して部屋からいなくなり、ようやくフウカと二人っきりになった。

その途端に俺は構わずに先ほどまで寝ていたベッドに倒れこんだ。

つ・・・つかれた！

とりあえずやらなければいけないことは終わった。畏まらなければいけない場面もなかったことはよかったのだけど、一転して自分の身の上が変わって初めての人に何人も会うのはどうしても気を消耗してしまう。

これからどうなるか考えることも放棄してベッドにうつ伏せになっていると、腰のあたりと頭に暖かい体温を感じる。

フウカがベッドで寝そべっている俺の腰の横に腰かけて、優しく俺の頭をなでてくれているんだ。

無言だったが、その手がよく頑張ったねと俺を労ってくれているようである。

5．3人の神との対面（後書き）

ここまでは『女神の憂鬱』のハヤト視点を書いています。
次回からはこちらだけでしばらく話が進みます。

正直、同じ場面を視点変えて書くのは普通に書くより楽だと思っていたのですが、私にとってはこちらのほうが難しいです。実際書いてみないとそういうことって分からないですね。でも、『女神の憂鬱』を読んでいない人でも分かるようにするにはここまでは書かないとだめだったのでがんばりました。

6．神、初日の朝

あ・・・白い壁。
ここはどこだ？
辺りを見渡してから無言で自分の胸に手をやる。
やはり現実か・・・。
現実であることを自分の柔らかい胸の感触で確かめるのはどうかと思うが、元男としてどうしてもその手段を取ってしまうことは許してもらおう。これが一発で現実と実感する手段なのだから。
ゆっくりと起き上がる。
どこか一瞬わからなかったけれどここはフウカと一緒にいた部屋だ。3人の神を紹介されたあと、ベッドに寝そべってそのまま寝てしまったようだ。
フウカはどこに行ったんだろう？
周りを見渡すが唯一の顔見知りである元姉の姿が見えない。

「姉貴？」

思わず声に出して呼んでしまう。自分でも予想外に彼女がそばにいないことに動揺しているようだ。
その時、がちゃりとノブが開く音が聞こえてきてそちらの方向を見る。
大きな扉ではなく、その反対側にある小さなドアである。

「はーくん、おはよう」

そこから変わり果てた外見をした元姉のフウカが、大きなあくびをしながら入ってくる。純日本人といった容姿だったはずなのに髪の毛は白っぽい金色で、腰まで伸びている。眼は右は金で左はスミ

レ色といった派手な色彩をしている。
今まで見慣れてた姉の姿はずいぶんと若返った上にすこしたれ眼になり、唇はだいぶふっくらとしている。素は姉貴だがかなり若く美形になってしまっていた。顔だけでなく身体も全身整形手術したようにみごとな凹凸とくびれを見せている。シンプルな白いワンピースを着ているのだが、そのプロポーションはそんな服の上からもはっきりとわかった。
おはようと挨拶しながらもどこか視線が定まっていないので、まだ半分以上寝ている感じだ。
どんなに外見が変わろうが朝の寝起きが悪いのは相変わらずなんだなと、彼女の姿を確認できた安堵も手伝って俺は大きく噴きだしてしまった。

「フウカ？起きているか？」

笑いながら彼女の顔の前で手を振る。

「ん～。起きているよ。はーくん・・・・・あ！ハヤト！」

寝ぼけた頭でも今の状況を思い出したようで、一気に覚醒したようにフウカは俺に声をかけてきた。

「だ、大丈夫？昨日は疲れちゃったでしょ？」
「ああ。昨日はごめんな。気が付いたら寝ちまってた」

俺がそう言うと俺の表情を心配そうに窺うようにしていたフウカの表情に、安堵の笑みが浮かぶ。

「いろいろと話聞きたいんだけど・・・」

俺がそう言ったと同じぐらいに大きな扉の向こうでノックの音がする。フウカが軽く返事すると、昨日服を持ってきてくれた女性ともう一人若い少女がワゴンのような物を持って入ってきた。

「「おはようございます。フウカ様、ハヤト様」」

二人は部屋に入った途端に笑顔で朝の挨拶をしてくる。

「おはようございます」

俺も決まり切った挨拶を彼女たちに返す。隣ではフウカも彼女たちに返事を返している。

「おはよう、ノア、セレーナ。あ、そう言えば自己紹介まったくしてなかったね。ノア、セレーナはもう分かっているだろうけど、紹介させてね。この子はハヤトで守護の神ね」

「ご誕生おめでとうございます、ハヤト様」

昨日の彼女ではないほうが元気よくそう言ってくる。明るい栗色の髪と黒の眼の今のフウカと同じぐらいの外見の女の子だ。眼が大きくヒラヒラの服を来ている。まるでメイド喫茶のコスプレみたいだが彼女にはよく似合っている。とりあえず彼女の爛々と輝く瞳にすこし圧倒されながらありがとうと小声で返す。

昨日の彼女も声には出さないが、俺の顔をみて軽く会釈をしてくれた。

「で、ハヤト。昨日お世話になったのがセレーナね。闇の精霊よ。で、こちらが光の精霊のノアね。いま、私はこの二人にお世話になっているの」

なるほど、精霊なのか。だがどう見ても人間にしか思えない。

「昨日話してて、セレーナがハヤトの身の周りをしてくれることになったので私がそばに居られないときとか、聞きたいことは彼女に聞いてね。もちろん、ノアでも大丈夫だけど一応メインはセレーナにお願いしたんで」

いつの間にかそう言う話になっていたのか・・・。まあ正直好みのタイプだし、落ち着きがある彼女のほうが助かるので異存はございません。

「えっとセレーナさんにノアさん。フウカ同様お世話になります」

そう言って軽く頭を下げる。すると二人は慌てて手を大きく振りながら俺にこう言った。

「ハヤト様！頭を上げてください。わたくしたちに頭を下げる必要などございません」

「そうです！それに呼び捨てで敬語抜きおねがいします！」

びっくりしてフウカのほうをみると、苦笑しながら頷いている。

「私もよくするんだけど、精霊たちに頭を下げたりすると相手のほうが畏まっちゃうのよ。これからお世話になるんだしさん抜きで呼んであげて」

なるほど、神と精霊との位の差なのか？

と言ってもフウカが言うように生粋の日本人にそれを求めるのはむずかしいぞ。

「分かったよ。セレーナにノア。よろしくな」

そう言って握手を求めて手を差し出した。これぐらいは大丈夫だろう。

すると、ノアと呼ばれた少女が感極まったかのような潤んだ瞳をこちらに向けながら、がしっと両手で俺の差し出した手を掴んできた。

「こちらこそ、フウカ様だけでなくハヤト様にまでお仕えすることができて本当に幸せです～」

「本当に他の精霊たちに嫉妬で恨まれてしまいそうですわ。かといってこの恵まれた立場を決して他の誰にも譲る気ございませんけど」

ノアに熱烈に手を掴まれたあと、セレーナもそっと両手で俺の手を包み込んでそう言う。

あまりにもその両手広げての歓迎ぶりにびっくりしてしまうが、何はともあれ拒絶されるより歓迎してもらったほうがありがたいと思うことにした。

その後、着替える服を準備してもらう。

服は今着ているもの同様、襟の詰まった上着とズボンだ。それに下着も男性でもいけそうなほどシンプルなブリーフのようなものを用意してくれている。昨日言う暇もなかったが、気を利かせてフウカがそう注文してくれたのだろう。ありがたい。

「そう言えばハヤト風呂入らずに寝ちゃったよね？朝だけど入る？」

フウカが思いだしたように言い出したことでそのことを思い出した。

風呂か・・・。また気力を消耗しそうな難関がやってきた。

だが、いつまでも風呂に入らない訳にもいかないだろう。

「入るよ」

ため息交じりに俺が返事するとフウカが、

「手伝おうか？」

と声をかけてくれる。

ありがたいお言葉だが、姉に身体を洗ってもらうのも微妙に嫌だ。

結局、セレーナに入浴の準備をお願いして風呂の使い方を説明してもらうと覚悟して一人で入ることにした。

セレーナもノアも何度か手伝いを申し入れてくれたが、姉以上に他の女性に風呂を入れてもらうことは嫌だったので丁重にお断りすることにした。

7．気を感じろ！

隣の席でフウカが果物を口にしながらこちらをじっと観察している。俺は構わずに同じように果物を食べていた。

「髪の毛切ってその格好だと本当に男の子か女の子か分からないわね」

しばらく見ていたフウカは俺にそう言う。

風呂入ったあと、セレーナとノアに強硬に止められたが、結局髪の毛をショートボブぐらいまで切ってもらった。自分でハサミ入れようとしたらあきらめたようにセレーナが切ってくれたのだ。本当はもっと切ってもらいたかったが、切るごとに悲しそうな顔をする二人を前にこれ以上断行することはできなかったのだ。

その後、用意してくれてた食事をする。

果物やパンもどきだけなのだが、不思議をお腹が減っていないのでそれで十分だった。

俺の食欲が落ちているせいかとおもっていたが、フウカから意外な事実を教えてもらう。

「この神殿にはたくさんの神がいるので、別に食事しなくても十分に生きていけるそうよ。本当に不思議な世界でしょ？」

なんでも神殿にいる神気のようなものが自然に体に入り込んでエネルギーを常に補充しているらしい。

なるほど。仙人が霞を食べているって話があるがそれと同じなんだ。

「と言っても、私は毎日何かしらは食べているけどね。特にこのセ

ラって果実はおいしくて毎日出してもらっているの」

そう言いながらリンゴっぽい形の果実を俺に差し出してくる。
俺はおそるおそる小さくかじると桃のような味が口の中に広がる。
たしかにおいしい。

「ねえ。ハヤト。今日は私が教えてもらった範囲でこの世界について説明するよ」

たしかにこんな規格外な世界だと、いろいろと教えてもらわないといけないようだ。
こうしてご飯を食べながらこの世界について教えてもらうことにした。

ここは出来たばかりの神の国で、俺も含めて32人しか神がいないらしい。それぞれに役目があるわけでそうなると、圧倒的に数が足らないということらしい。

「は？おれで7人目？」

中でも女神は不本意ながら俺も含めてたった7人。男女比悪すぎだろう。

「あまり驚かしたくないけど、今後のこともあるから言うね。ここって多夫多婦制なんだって。たとえば愛の女神のビュアスさんは5人の男神の恋人がいるらしいの。で、女神が貴重だからってけっこう男神に言い寄られたりするらしいから気をつけてね」
・・・・・。
本当にむちゃくちゃな世界だ。男5人で女1人ってあり得ないだ

ろう。まあ割合的にも5人弱に1人しか女性がいないのなら仕方ないのか？
目の前のフウカを見る。完璧な外見である。性格も生真面目すぎるが悪くないだろう。もしかして・・・とつい思ってしまい、おそるおそるフウカに訊ねてみた。

「フウカはオリセント以外にいるのか？」

それに対してフウカは一瞬だけ言葉を詰まらせてから、真っ赤な顔をしながら大きく頭を振って全否定をする。

「い・・・いないわよ！」

だが、付き合いが長いだけに彼女が嘘とまで言わないがなにか疾しいことがあるのだろうと、簡単に推測がついた。

「もしかして、フウカ自身が言い寄られているとか？」

確信を持って問い詰める。
フウカはもう一度言葉を詰まらせる。図星であるとでっかく真っ赤に染まった顔に書いている。まあこの容姿だったらそうなっても仕方ないわな。

「わ、私のことは置いといて。ハヤトは中身は男でも外見はしっかり女の子なんだから他人事だと思ったらだめだよ？」

フウカは動揺しながらも俺に指さしながら忠告をしてくる。
ありがたい忠告なのだが、それは俺の気持ち的に重くのしかかってくる。
女になっただけでも嫌なのに、そんな女が不足している世界で過

ごすのかよ？貞操の危機なんぞやめてくれよ・・・。
おもいっきりげんなりしてしまう。
なんとか撃退方法はないものか？
その時俺が思いだしたのが、昨日セレーナや神たちがしていたテレポートだ。

「そういえば、昨日みんなテレポートしてたけれど、俺たちもできるものなのか？」

瞬間移動できれば逃げることも可能だろう。と言ってもどんな感じでできるのかまったくわからないけれど。

「私はできたよ？と言ってもまだまだ上手にできないんだけどね」

フウカはすこし恥ずかしそうに答える。

「ふ～ん。他になにができるんだ？」
「空跳ぶことと、心声って言ってテレパシーみたいなものかな？あとこれは私が癒しだからだろうけど、ドラクエで言うホイミ系ができるよ。魔法のランプみたいに物を出すことはまだやったことないや」

なるほど。けっこうなんでもできるもんだ。

「へえ～。どんな感じか見せてくれよ」

やはり同じ人間だったフウカができるところを見てみたい。彼女ができるなら俺もがんばればできると思えるからだ。
俺がそう言うと彼女はすこし考えるようにしてから、いきなり席を立って部屋の奥にある寝台のそばにある引きだしから小さな箱を

持ってきた。

「ねえ。ハヤト。これどう思う？」

そう言って差し出してきたのはシンプルなペンダントだ。金平糖のような細長い石が付いている。

「ん？なんだ？いきなり。シンプルでいいんじゃあないか？」

「まさかハヤトにあげることになるとは思わなかったけど、そのために作ったんだしよかったらもらってくれる？」

そう言われてはじめて産まれてくる子の為にフウカが作成していたのだと分かった。なるほど。そう言うことか。

アクセサリーを身につける習慣はないが、これは頂いておくべきだろう。幸い、シンプルで悪くない形なので付けることに抵抗感はない。

「ああ。せっかくだからありがたくもらうよ」

俺はそう言って手を差し出すが、フウカは軽く頭をふって渡そうとしない。

「まだ、完成でないの。私の癒しの気をこの石に込めるから見ててね」

そういうとフウカは色違いの瞳を閉じて大きく深呼吸する。

石を握る右手を胸にあてて、しばらくその体勢で立っていた。

こちらには何が起こっているのかまったくわからない。ただ突っ立っているようにしか見えない。

しばらくすると、フウカは大きく息を吐きながら握っていたペン

ダントを差し出してきた。
それを俺は無言で受け取る。
「あれ？」
石の輝きがさきほど見たときとはまったく違うものになっていた。透明の石の中央に輝く光が入っている感じだ。中に傷が付いているのかと思ったが、じっくりみてみると光が中に閉じ込められているのだと分かった。礼を軽く言って首に付けることにした。ひも状なので後ろでくくる。
「私の気見えた？」
フウカが息を整えながら聞いてくる。
気？見えるものなのか？まったく見えなかったので頭を大きく振る。
「そうよね。私も最初は見えなかったし・・・そうだ。もう一つ作ってみるから、今度はこちらを見たまま瞑想するみたいに目を閉じていて」
そう言われて目を閉じる。黙とうするような感じでいいのかな？しばらくすると、真っ暗だった空間に暖かい光がぽっと浮かんできた。それが徐々に大きくなっていく。
「なんか光っているぞ？」
俺がそう言うとすぐにフウカの声が聞こえてくる。
「やっぱハヤトもすぐ見えるんだね。その光を見ながらゆっくりと

目を開けてみて」

言われたとおりにおそるおそる目を開いていった。

さきほどと同じようにフウカがペンダントをにぎっているのだが、その手からクリーム色の輝きがまぶしいほど見えていた。いや、よく見るとフウカ自体が同じ色で輝いている。その輝きは大きくなったり小さくなったりと常に動いている感じだ。

これが気なのか・・・。

「見えた？」

フウカの問いにただ無言でうなづく。

「同じように自分の気も感じることができると思うよ。目を閉じて探してみて」

その通りに目を閉じると、自分の身体からさきほどの金平糖色の宝石と同じ色彩の気が出ていることに気がつく。

すごく簡単にできてしまったぜ・・・。

目の前の少女も俺も人間でなくなったのだなとここで強く感じた。

7．気を感じろ！（後書き）

はやくコメディーにしたいのですが、状況説明だけでここまでかかってしまいました。
いつになったらテンポいいコメディーかけるかしら・・・。

8．口説くのは禁止だ！

気を感じ取れるようになると、目の前の元姉貴の少女も俺もこの神殿の空気すら違うように感じる。フウカの周りは暖かいクリーム色の気が鼓動のように揺れながら取り囲んでいる。

さらに神殿については様々な色の気が入り混じっている。なるほど、この神気とやらがあるからエネルギー補給がいらないってわけか。

「じゃあ、私はいまから用事があるから行くね。あ、その代わりに1人ハヤトにいろいろ教えてくれる人が来る予定になっているからね」

フウカはそう言うと早々とその場から姿を消した。元人間だったはずのフウカまで当たり前のように瞬間テレポートを使っているのだ。

「俺、姉・・・じゃあなかったフウカみたいにここに馴染めんのかよ・・・」

気が付いたらそんなつぶやきが俺の口から出ていた。いつも一緒に居たフウカを離れてつい後ろ向きな考えが、俺の頭によぎる。

「あー！やめやめ。んなこと考えても仕方ねえしな。弱音はここでしゅうりょ～！」

短くなった髪をぐしゃぐしゃと掻き上げながら、俺はわざと大きな声でそう叫んだ。おかげで僅かにだが気持ちがすっきりする。

トントン！

叫んですぐに自分しかいないはずなのにいきなり音が立ったので、反射的に身を縮めてしまう。
あ、ノックか。
その音は扉の向こうから叩く音であった。フウカが来るっていってた人かな？

「は～い。どうぞ」

俺が返事するとすぐに扉が開いて来客者の姿を見せる。

「はじめまして。守護の女神さん」

そう言って俺に近寄ってきたのは派手な色をした１８歳ぐらいの青年であった。やはりそれなりに整った顔立ちに身体付きだ。神だからみんな見た目がいいのだろうか？
透明がかった水色の長いウエーブのかかった髪を一くくりにしばっている。すこしたれ眼がちな眼は青色をしている。こんな色の人は初めて見た。まあフウカも大概派手な色してるが・・・。
彼を取り巻く気は髪の色と同じく水色だ。フウカと同じぐらいの大きさがあるが、フウカと違って鼓動のようなものがない。

「僕の名前はエダ。水を司っているよ。今日はフウカにお願いして君に会う時間を作ってもらったんだ。彼女から話は聞いている？」

こちらを楽しそうに見ながらエダと名乗る青年は聞いてくるが、俺としてはまったく話を聞いていない。さっきも教えてくれる人が来るとしか言ってないし。

「いや。全然聞いていません。今日教えてくれる人ですか？」

正直に答えると彼は楽しそうに口元に笑みを浮かべながら頷いてくる。それならば俺も名乗らなければと口を開く。

「ハヤトと言います。エダさんは俺の事情を知っているのですか？」

「知っているよ。さっきフウカに散々釘を刺されたから。ハヤト。僕にさん付けも敬語もいらないよ」

あのフウカが彼に何を釘を刺したのか？のんびりとした彼女があえて彼に忠告する内容がよくわからない。だが次の瞬間、彼から爆弾発言が飛び出す。

「僕がフウカに子供が女神だったら一番に口説くって宣言してたからね～」

・・・・。

一瞬思考回路がショートしてしまう。つまりはこの人当たりがよさそうな兄ちゃんが、俺を口説くとか言っているのか？外見は少女かもしれないけれど、俺の気持ちはまだまだ社会を経験した立派なおっさんである。

「まあ、フウカから事情聞いたから今すぐは遠慮するよ」

そう言われてあからさまにほっと胸をなでおろした。こんな体になってしまったところの俺にはハードルが高すぎる。

しかし、安堵し身体の力を抜いたとたんに、再び爆弾を投下される。時間差攻撃とは卑怯だ。

「あ、でも。ハヤトがだれか他の人に口説かれているのを知ったら、僕も容赦しないつもりだからね」

彼の顔を思わずじっと見るが、瞳が獲物を狙う獣のように爛々と

輝いていてそれが本気であることを物語っていた。
なんで、初めて顔を合わせたばかりでこんな宣言をされるんだ？
「なんでって顔しているね。僕ね～。好きな人がついこの前までいたんだ。でも、彼女が恋愛まで頭がまわない状態だったから遠慮してたわけ。そしたら気が付いたら他の男に取られちゃったんだ。だから今度はそんなへましたくないんだよね」
そう言われて俺はその相手が誰だかすぐにわかった。フウカのことだ。他の男とはオリセントのことだろう。でもだからってその娘にってのはどうなんだ！そこまで女が不足しているのか、ここは。
「かと言ってもすぐに口説くつもりは今はないよ。僕もハヤトのことまったくわからないし、ハヤトも僕のこと知らないもんね。だからとりあえずは一番近くでいろんな話ができるポジションに立てたらそれで満足だから」
自分の気持ちを正直に話す軽そうな青年に対して、俺も本音をそのまま伝えることにした。ついでに敬語も取り外す。
「えーと・・・、エダ。事情知っているなら俺が男だったって知っているわけだよな？色々教えてくれるってのは嬉しいけど、フウカ以上に恋愛・・・ましてや男となんぞ到底ありえねえってもんだよ」
俺はここで、一呼吸おいて彼を真っ直ぐ見ながら問いかける。
「だから悪いけど、エダの思い通りにはいかないぞ？それでも一緒にいたいと思うわけ？」
「わかっているよ。そんなの。でも、男女関係なく仲良くはなれると思うけど？」

平然とそう答えられて俺は大きなため息をつく。フウカ以外と接さないわけにもいかないだろうし、分からないこの世界についていろいろ教えてくれる存在は必要である。口説くとか言ってくるのは迷惑だが・・・。俺が相手にしなければ済む話だろう。そう言うところを除けば目の前の青年に悪い印象もない。

「俺を女扱いしないか？」

これだけは確認しておかねばと、彼を凝視しながら聞くことにした。それに対して彼はずいぶん楽しそうに笑いかけながら答えてくる。

「だからそれはハヤト次第だね。君が隙を見せずに男として振る舞っているうちは、僕はそのように接する事にするよ」

なんとも曖昧な返事だ。だが、とりあえずは普通に接してくれると言っているのだからそれを信じるしかない。

「俺としてもフウカがいないと右にも左にも動けない状態だから、誰かがいてくれるのはありがたいけどな。で？これからどうすればいいんだ？」

ここは男として振る舞ったほうがいいみたいだし、言葉づかいも素のままで目の前の少年に聞く。

「さっきフウカから気は分かるようになったって聞いたからな～。ハヤトは実技と話とどちらがいい？」

「実技！テレポートがしてみたい！」

俺は即答する。話はフウカがいるときにあれこれ聞けばいいんだし、やはりテレポートやらテレパシーをやってみたいという好奇心が抑えきれない。テレポートと言う言葉がないのかエダに聞き返されて瞬間移動と言うとエダが思い出したかのように噴きだす。

「そういえば、フウカにも瞬間移動を僕が教えたっけ。最近でこそマシになったらしいけど彼女、方向音痴でなかなか思うところに跳べなくてこっちがひやひやしたんだよ。君ももしかして方向音痴？」

そう聞かれて思わず俺も爆笑してしまう。フウカは昔っからありえないほど方向音痴だった。子供のころはよく迷子になったもんだ。まだ治ってないのか。しかしテレポートに方向感覚が必要とは思いもしなかったぜ。

「いや。小さい頃は手をつないで俺がフウカを道案内する役だったから」

「それを聞いて安心したよ。瞬間移動自体はフウカも簡単にできていたし、それほど難しくないからすぐできるようになるよ」

こうしてエダにさっそくテレポートを教えてもらうことになった。

8．口説くのは禁止だ！（後書き）

次回の更新は『女神の憂鬱』になる予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0282o/

勘弁してくれ！

2010年12月31日07時50分発行